



日本映画と日本の文化伝統

佐藤 忠男

以前よく、日本映画に関心を持っている外国人たちから、日本の映画監督たちの中では誰がいちばん日本的で、誰が西洋的なのかと聞かれた。溝口健二と小津安二郎と黒澤明では、主題も方法もスタイルもまるで違う。伝統的な要素はどこにあるのだ、ということである。なかには黒澤明は西洋的なのだと考えている人も少なくない。

私はいつも、この三人はそれぞれに伝統と深いかわりがある、と答える。一口に日本の伝統と言っても、じつは非常に多様なものがあるのだとまず分かってもらわなければならない。たとえば黒澤明の映画の多くは侍のものの考え方や行動の仕方の伝統をよく表現していると見えるだろう。責任感や勇気や力強さなどの表現は武士道の精神に直結している。これに対して溝口健二の映画の多くは江戸時代の町人階級の文化に直結している。すなわち、優美さと人間観察の辛辣さの共存である。小津安二郎が足場としているのは近代小市民層の文化感覚である。ハイカラさ、おだやかさ、知的な誠実さ、などである。

日本文化という単一の伝統があるのではなくて、実際はその中には階層ごとに多様な違った伝統が成り立っている。たとえば農民的伝統というものも大きな流れとしてあって重要だ。律儀さ、実直さ、ねばり強さ、田坂具隆や新藤兼人がこの伝統に深く根差した映画監督だと思う。しかし現実には近代において農村は大きく変化し、農民の多くが都会に出てきて都市の下層社会を形成した。新藤兼人は彼自身、没落した富農の息子で都会に出て撮影所の下積み肉体労働を経験した人だが、正統的な農民気質を描いた映画を作るいっぽう、そうした都市流民とも言うべき層の生き方もよく描いた。そこにもまた独自の伝統的なスタイルがある。

今村昌平は東京の知識層の家庭の出身なのに、そういう農村出身の都市流民に強い関心を持って、もっぱらその、なりふりかまわぬ生活のあり方を描いている。しかしこうなるともう、世界のどこでも共通で、日本の伝統ということはあまり関係がない。大島渚が描く日本人も世界の共通の現代人と言えるだろう。こうして近頃は、誰の映画がいちばん伝統的なものなのか、という質問はあまりされなくなった。

(映画評論家)